
普通のこと。

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通のこと。

【Nコード】

N3753M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【アルト×シェリル】シェリルにとって、アルトは「トクベツ」なのです。

※拍手おまけ話あり

ねえ、アルト。

アルト。アルト。

あなた、私がどれだけあなたの名前を呼んでいるか、知らないでしょう。

私がどれだけ、あなたを愛しているか、知らないでしょう。

ねえ、アルト……。

★
☆
★

「ああーっ、もう、なんだっていうんだ。お前はっ！」

早乙女アルトは怒りを隠そうともせず、艶やかな黒髪をガシガシとかきむしりながら、目の前で余裕たっぷりな様子で座っているシエリル・ノームをにらみつけた。

「何よアルト。文句あるっていうの？」

白磁の肌をほんのりと桜色に染めて、ぷうと頬を膨らませアルトをにらみつけるシェリル。

「大有りだ。なんだって俺が、休みの日に呼び出されてお前の付き合いをしなきゃならん」

「ひどいわっ！ 私の大切なイヤリングをなくしておいて！」

アルトが言い終わるか終わらないかのうちに、シェリルは叫んで涙を浮かべた顔をついと横に向け、豊かなストロベリーブロンドから覗く左耳をアルトに見せた。そこには彼女のグラビア写真などでは必ず光っている紫の特殊な輝きをみせるイヤリングがなかった。

ぐつと答えに窮するアルト。

そのアルトをみて満足げに微笑むシェリル。目元には涙が光っている。

勝敗ははなから決まっていた。

「あ、あれはだなあ……ルカを助けるときに……どこーんと……すまん」

「わかればいいのよ。じゃ、行きましょ」

シェリルはうなだれるアルトの腕をがしつと抱え込むと目的地へ向かって歩き出した。

★☆☆★

アルトの眼前にそびえたつ門には「美星学園」の文字。

昨日もくぐった門だった。休み明けにもくぐることになるだろう。通いなれた道、見慣れた施設。

そう、シェリルが意気揚々とアルトを引きずって来たのは、学校だった。

「なんだ？ お前。学校になんか用事あったのか？ だから制服で来いって指定か」

アルトは自分の制服の上着をつまみあげながら、ちらとシェリルの制服姿に目をやった。

「パイロットコースはハードだから、練習しないと単位落としちゃうんですもの。だから、付き合いなさい」

「なんだ、そういうことなら最初から言えよ。いくらでも付き合ってやるよ」

頬を赤く染めて恥ずかしそうに答えたシェリルに、アルトは微笑みながら彼女のストロベリーブロンドの髪をくしゃっとなるでる。

「だって……」

「ん？」

言いにくそうにもじもじとして、更に頬を赤く染めるシェリルの様子に、アルトの心臓がどくと脈打つ。

「やっぱいい、なんでもないわ」とアルトの手が乗ったままそっぽを向いたシェリルに、噴出しそうになるのを必死でこらえて持つて行かれた手の向きを元に戻す。

何をされたのかときよとしたシェリルの顔を正面にすえて、アルトは彼女の空を映したような蒼い瞳を見つめた。

「言えよ」

シェリルは「アルトのくせに生意気」などとぶつぶつ言いながら頭の上に乗ったアルトの手をのけようと必死になっていたが、シェリルが話すまで頭に乗せた手をのける気がないとわかると、そのアルトの手をぎゅっと握って、シェリルは拗ねたような上目遣いでアルトを軽くにらみ頬を膨らませた。

「なによ、アルトのバカ」

「ハイハイ。……で？」

「だって……」

「ん」

「………った…ですもの……」

「ん？」

真っ赤になってうつむきそうになるシェリルを逃すまいと、アルトは膝を曲げ、シェリルと目線合わせると、「ん？」と甘い声を出して首をかしげ、優しい琥珀色の瞳で見つめた。

「一度……………」

「うん」

「やってみたかったですもの」

「何を？」

「……………」

「言ってみろよ。内容によっちゃあ叶えてやれるかもしれない」

「学校……待ち合わせして、行ったり……一緒に、宿題したり……
帰り道、寄り道したり……」

アルトは、銀河の妖精と言われる目の前の少女が、どんな無理難題を言っただけなのかと、できるだけ希望を叶えてやりたいがため、腹を据えて聞いていたが、言いにくそうに口にする“望み”は、拍

子抜けするほどとても簡単なものであった。

「なんだ、そんなこといつも……は、やってないか」

シェリルは寂しそうに微笑んでうつむくと、「憧れだったの」と小さくつぶやいた。

アルトは、シェリルの頭に乗せた手でシェリルの頭をぐしゃぐしゃにすると、シェリルの手を取り歩き出した。

「ほら、行くぞ。取り合えず今日は、『宿題』と『寄り道』だな」

ぐしゃぐしゃにされた髪を気にしながらも、アルトに掴まれている手をぎゅっと握り返し、シェリルは嬉しそうに口元に笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753m/>

普通のこと。

2010年10月10日14時05分発行